



上川地方本部執行部独自行動

1日目

泊原子力発電所視察 泊は本当に安全なのか

今、「さようなら原発 1000 万人アクション」の取組みを展開中ですが、地本執行委員会の中で、『単組にやれやれと号令掛けているばかりでなく、地本執行部自らも何か行動を起こそう』と、当初予定していた執行委員会を変更し、11月12・13日に地本執行部独自行動を実施することとしました。

内容は、地本執行部の「学習・交流・実践」を目的に、脱原発を訴えるためにも、自分の目で原発を視て、学習することが必要ではないか。それでは「まず泊原発へ行こう」ということになりました。

現在、泊発電所は展望台からの見学だけで、一般公開はしていませんが、今回特別対応で原発内の視察も可能となりました。

当日は、地本執行委員13名(執行委員会より出席率がいい(笑))の参加となり、午前10時に旭川を出発。午後2時に「原子力PRセンターとまりん館」に到着しました。

とまりん館では、北電労泊特別支部佐藤書記長(専従)に出迎えていただき、佐藤書記長の案内で泊発電所概要説明・泊3号機・展望台を見学しました。

まず、とまりん館佐藤副館長から、泊発電所の概要について説明。泊3号機は日本では最新の原発で、2009年12月22日に営業運転開始。(1・2号機は定期点検中)特に、安全面や福島と同様な事故を起こした場合の対応などの説明があり、原子炉自体が福島と泊とは異なり、放射性物質を含んだ水がタービンなどにかからない仕組みでこの部分の放射線管理が不要で、タービン建屋の補修作業も作業服ヘルメットのみでの作業とのこと。また、原発における安全の基本は「止める」「冷やす」「閉じ込める」が重要で、福島の事故では原子炉は地震で自動停止し「止める」ことはできたが、「冷やす」「閉じ込める」ことができなかった。その最大の要因は電源を長期にわたり確保できなかったため、泊では事故後に電源確保のため非常用発電機の配備や移動発電機車を新たに配備している。また、泊は海拔10mに立地しており、津波対策としては原子炉建屋入口に防潮扉を設置。将来的には防潮塀の設置も検討している。

その後、3号機原子炉建屋の中央制御室・タービン建屋・燃料取扱棟などをガラス越しに見学。燃料や使用済燃料の搬出入は、原発隣接の専用港で行われ、固体廃棄物は施設内貯蔵庫でドラム缶18,000本保管できるが現在約7,500本となっている。

また、泊には北電社員で450名、関連会社で1,000名が常駐しており、定期点検時にはさらに1,000人が、2・3ヶ月滞在し、近隣町村の民宿なども含め一杯となるそうです。

参加者からは、セキュリティ対策の厳重さに対する驚きはあるものの、安全性を確信したという声はほとんどなく、反面、泊村が交付税不交付団体で医療費・バス・プール(とまりん館)などが無料という現状の中。住民にとっての幸せとは何か。自治体として地域振興や雇用さらには産業振興といったあらゆる自治体が抱えている問題をどう考えるのか。改めて、考えさせられたという意見が多かったです。そして、参加者一同、この時期に貴重な経験ができ参加してよかったという想いで、宿泊先の札幌へと向い、夜は道本部大出書記長にも参加いただき、2日目の行動を考慮した範囲で、今度はしっかりと交流を深めました。



泊発電所の概要説明を受ける参加者たち



とまりん館での記念撮影(左上が佐藤書記長)